

スコットランドとその首都エディンバラの紹介



日本国政府専用機と筆者（2021年）

佐々木 剛

（ささき たけし）

前・在エディンバラ日本国総領事館領事
国土交通省北海道開発局稚内開発建設部稚内港湾事務所第2工務課事業専門官

1998年北海道開発局入局。網走開発建設部配属。旧北海道開発土木研究所での勤務の後、再び網走開発建設部に所属。その後、九州地方整備局、札幌、留萌、小樽、稚内の各開発建設部での勤務を経て2019年3月から2022年3月まで在エディンバラ日本国総領事館広報文化班に所属。現地での日本文化の広報、現地の広報文化活動の支援などを担当。2022年4月から現職。

はじめに

スコットランドは、イギリスの北部に位置する英国を構成するカントリーの1つです。

スコットランドは国家として独立していないのですが、先日まで開催されていたサッカーW杯や、2019年に日本で開催され大きな話題となったラグビーW杯では、スコットランド代表として参加しています。このことから、みなさまの中には「スコットランドはどこ

の国なのだろうか？」と思われる方もいるのではないのでしょうか。

今回は、スコットランドという“カントリー”について、そしてこのスコットランドの“首都”であるエディンバラ市について、ご紹介していこうと思います。

グレートブリテン及び北アイルランド連合王国

冒頭で述べたとおり、スコットランドは英国を構成する4つの“カントリー”のうちの1つです。“カントリー”というのは、国家ではなく、^か且つ州や県といった行政区画でもない特別な地域です。これら地域を表す正式な名称がなく、適切な和訳もないため、ここでは“カントリー”と称しています。

英国の歴史の中で、これら“カントリー”はとても複雑で興味深い関係性があったことがわかります。英国の首都ロンドンを内包し、面積や人口等でも中心的な存在となるイングランド、そして北部にあり独自の民族と文化を持つスコットランドの両国は、長らく敵対関係にありました。そして今から約300年前の1707



スコットランド、エディンバラ図

年に、合同法によってこの2国が合併、グレートブリテン連合王国となり、現在の英国の基盤となりました。

英国はその正式名称をグレートブリテン及び北アイルランド連合王国といい、その名のとおり4つの王国が連合した国となっています。私たちが一般に用いる「イギリス」という国名はあくまで通称であり、公の場では「英国」が用いられます。先に述べたイングランドとスコットランド、そしてウェールズと北部アイルランドが、連合王国を構成する4つの“カントリー”です。



イングランドとスコットランドの“国境”

スコットランドの概要

英国の北部に位置するスコットランドは、北海道よりも高緯度にあります。日本最北端となる稚内市の宗谷岬でも、その緯度は北緯45度31分ですが、スコットランドの中央部にある首都エディンバラの緯度は、なんと北緯55度56分。我々が想像するよりもはるかに北にある地域です。

では、この地域が北海道よりもはるかに寒いかというと決してそんなことはありません。真冬の寒いときでも気温が氷点下を下回することはそうなく、高いときは、最高気温が10度を超える日もあります。

雪が降るのは年に10日程度。そのうち1回か2回はやや積もることもあります。

冬期は日照時間も短く、すっきりと晴れる日も少ないのですが、3月に春分の日を迎えたあたりから昼の時間はぐっと長くなり、晴天の日も多くなってきます。夏には日没時刻が22時までと非常に遅くなります。



年に数回は大雪に見舞われることも

このころは20時や21時になっても青空が見えていてなんとも不思議な気持ちになります。昼の時間は長いのですが、気温はそう上がらず、高くても20度前後です。数年に一度25度まで達することもあるようですが、少なくとも私が暮らしていた間では一度も体験することができませんでした。

英国の約6,700万人の人口の内、スコットランドには約550万人が生活しており、その面積は78,800km²であり、これは人口530万人、面積83,500km²の北海道と同規模です。自然が豊かで海産物が美味しく、人々が優しく温かいこともまた北海道を感じさせます。

スコットランド中央部には首都エディンバラと、スコットランド最大の都市グラスゴーがあり、この2都市周辺だけで人口の半分以上が集まっています。



北海道のような(?) 大自然

首都エディンバラ

エディンバラは長い歴史を持つスコットランドの中心地です。現在はスコットランド議会及び行政府が設置され、多くの金融センターがあることから、スコットランドの政治・経済の中心地としての役割を持っています。スコットランド街の中心部にはエディンバラ



エディンバラ城を中心とした市全景

城がそびえ立ち、東西に走った線路により南の旧市街（オールド・タウン）と北の新市街（ニュー・タウン）に分かれています。この両市街はどちらもユネスコ世界遺産に登録されており、エディンバラはその街全体が世界遺産となっています。

17世紀まで、エディンバラに住む人々はエディンバラ城周辺に築かれた狭い城壁の中に暮らしており、その人口密度は非常に高く、窮屈で不衛生だったそうです。人々はこの旧市街から飛び出すべく、エディンバラ城の南側を都市として計画し、新市街を形成しました。こうして同じエディンバラ市にありながら、大きく雰囲気の違う市街が見られるようになったのです。

このため、新市街といっても、その歴史は数百年近くあり、街すべてが歴史ある建物ばかりです。どこにカメラを向けても絵はがきになると形容される街並みは、本当に美しく、いつどの時間にどこを歩いても、建物の美しさに目を奪われます。



絵になる街並み

エディンバラには、世界遺産の旧市街、新市街、そしてエディンバラ城のほか、過去スコットランド国王夫妻の住居として使用されており、先日崩御されたエリザベス女王の滞在にも使用されていたホリールード宮殿など、多くの観光名所があります。これら名所には年間通して多くの観光客が訪れることから、エディンバラは政治・金融の中心地としてだけでなく、観光都市としての側面を持っています。

エディンバラが観光都市としてもっとも華やぐのは、毎年8月の“フェスティバル”開催期間です。エディンバラ・フェスティバルというのは、8月に複数の芸術、文化の祭典が開催されることです。

最も大規模なフェスティバルは、エディンバラ・インターナショナル・フェスティバルです。エディンバラの著名な劇場、スタジアムなどに世界一流の演劇、クラシック音楽、ダンスやオペラの演者が招待され、連日公演を行います。これは第二次世界大戦の傷も癒えぬ1947年に、英国とスコットランドが世界の復興を祈念して始めたもので、70年を超える歴史があります。

また、これに準ずるフェスティバルとして、エディンバラ・フェスティバル“フリンジ”があります。「フリンジ」には「周辺」という意味があり、もともとはエディンバラ・インターナショナル・フェスティバルに招待されなかった劇団が、会場の周辺で自主的に公演を行ったことを起源としています。フリンジ事務局に登録料を支払い、会場を確保できればどのようなジャンル、パフォーマーでも参加できることから、現在ではエディンバラ市内のあらゆるステージ、小さな劇場、パブの片隅、通りの脇まで、数百の会場で多くのパフォーマンスが披露されています。日本からも多くの劇団や芸人が参加しており、どれも高評価を得ています。

エディンバラ城では専用の会場が設立され、英国軍スコットランド駐留部隊によるミリタリー・タトゥーが開催されます。スコットランドの伝統的な楽器であるバグパイプの演奏をしながら大規模な行進を行います。過去には海外からゲストが招かれ、2017年には日



フリンジの中心会場

本の陸上自衛隊中央音楽隊が参加し、素晴らしい音楽を披露しました。

このほかにもエディンバラ国際映画祭、エディンバラ国際ブックフェスティバルなど、10を超えるフェスティバルが市内で開催されます。この期間は世界各地から多くの観光客が訪れ、街は歩くのも困難なほどで、スコットランドの短い夏は最高潮に盛り上がります。

スコットランドと日本

江戸幕末から明治にかけての日本は、近代化を目指して西欧諸国から技術や学問、そして政治の制度などを取り入れていました。産業革命により世界の最先端技術を持っていた英国、そして産業革命の中心地であったグラスゴー市を擁するスコットランドからは、多くの技術者が日本に招かれ、高い技術を日本に伝承しました。

現在の東京大学工学部の前身となる工部大学校の初代教頭として、日本への技術教育導入に貢献したヘンリー・ダイアー氏。日本造幣局（当時の呼称は造幣寮）の初代首長となり、日本の貨幣制度の確立に貢献したトーマス・ウィリアム・キンダー氏。歴史をたどるとさらにたくさんのスコットランド出身者の名前が出てきます。また、明治政府に雇われた方ではないものの、日本の近代化に強く貢献したトーマス・ブレイク・グラバー氏があります。

グラバー氏は、商人として来日し、主に九州地方で西洋式技術を導入しました。長崎市に船舶ドックを建設し、造船の街長崎の礎を築いているほか、日本のエ

ネルギーを支え続けた高島炭鉱の開発、当時の三菱財閥の相談役として、麒麟麦酒（現在のキリンビール）の設立に関わるなど、日本の近代化に大きな役割を果たしています。

このように、スコットランドと日本は深い関係があるものの、日本ではそれほど知名度が高くありません。しかしながら、その名のとおりスコットランド産であるスコッチ・ウイスキーを始めとして、タータン・チェックやペイズリー柄はどれもスコットランド発祥のものでし、別れの際に歌われる蛍の光もスコットランド民謡であるなど、私たちの生活に関わるものが多々あります。

おわりに

スコットランドで過ごした3年間、日本との文化の違いや生活習慣の違いに戸惑うことばかりでした。スコットランドも日本と同様、あるいはそれ以上の先進国であり、インターネットやITを活用した優れたサービスが行き渡っていますが、日本ほど顧客を優先したサービスではなく、最初のうちはそれに慣れず、不親切な国だと思うことが多々ありました。しかし、顧客とスタッフはあくまで同等であるという考え方が根付いていることに気づき、慣れるに従ってそれが自然になってきました。幾度か書いているとおり、日本においてスコットランドは知名度の低い地域だと思えます。ですが、スコットランドの人々は誰もが日本を知り、日本を好んでいます。私は在エディンバラ日本国総領事館の広報文化班長として、スコットランドで日本の文化を広める業務を担当しました。また、プライベートでも多くのスコットランド人と交流しました。その際、私が日本人だと知ったスコットランドの方々は、どの方も親しげに日本の良いところや好きなところを私に伝えてくれました。このとき、私は自分が日本人であることを非常に誇らしく思い、日本の好感度を上げてくれた先人たちに深く感謝しました。皆様もぜひスコットランドを知り、スコットランドを好きになり、日本とスコットランドの交流に関わっていただきたいと思います。